

銀鈴第十一號 (每月一回二十日發行)
明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可

明治三十九年三月二十日發行



明眼

號壹拾第

銀鈴第十壹號掲載目次

— 禁 轉 載 —

春 曙 集(短詩).....	河野翠漱	内 裡 籬(短詩).....	濱田支部
銀鈴の詩風を論じて島根詩人の	將來に及ぶ (評論).....	立石洲洋	短歌 小評(批評).....
うぐひす(短詩).....	〔牧岡馨子〕	漫 語 一(雜文).....	〔素のぼな〕
埋火のほどり(美文).....	荷影女史	くれなゐ(短詩).....	〔鳴かぬ鳥〕
俳句 募集.....		銀鈴社投稿規程.....	
うつろ 舟(短詩).....	古川三尺等	漫 語 二(雜文).....	〔天劍生〕
春 の 殿(長詩).....	馨 子	控 帳(雜文).....	
囚はれし人、放たれし人.....	〔雜文〕 大屋生	寄贈 新刊.....	
潮音會俳句(俳句).....		社友 清規.....	
勿 告 藻(短詩).....	松江支部	廣 告.....	



春 曙 集

一 春

銀 鈴

第拾壹號

明治三十九年 三月二十日發行

河 野 翠 漱

雨する日うぐひす飼へる白揚の家のあるしに來し使ひま
 菜の花の七丁にして家わりと
 をしへたまへる老の君よ
 春の水ぬなは搦む手のたるとよ
 り風ふきにけりあたたかからして

つつましき御達ばかりが金屏に
 速歌じてます春の雨のいな
 夕月や馬に乗りたる美くしの
 少年に散る山さくら花
 春風は河をわたりて里すの
 河がいほりにそよ吹きにける

われ生れて霞する日の山あろび
遠八重さくら見てありぬよし

扇つかへ白き手さしぬ舞の人
ほりする歌は興へたまへな

春の雨落花する日の河やなぎ
橋をこねたる美しくしき人

知らぬ花あまたかぞへし野の春の
日はむらさきにさすと思ひぬ

戀

おぼる月まる賤ふたりの片袖に
さくらふぶきす草の家かな

ふくよかに朝髪ゆひじ十六の
妻とれもへば何しひぬべき

思ひあまう文すどよれる几にも
桃が香にくる春の風しぬ

つつましきおんかたちなり踊るさの
なみだばかりは美しくしうして

花さく日なよびやかなるすがたして
流れをこねぬわが思ふひさ

ふと覺めぬ君がよびしに似てあれば
扇にふける春の夜のかぜ

水の音白き藤さくあづま屋の
桂に立ちぬ物語りして

そひぶしの黒髪めでてあるほせに
いぬぬさうとに月のさすまで

二十すぎし人を思ふと髪ながき
なとめの泣きぬうぐひすかこに

やよひ月ともし火もせずなよびかに
袖をかされて待ちたまひしや

『銀鈴』の詩風を論べて島根
詩人の將來に及ぶ (承前)

立石 洲 洋

停滯せるものは必ず腐敗す。停滯必らずしも定住不
變の謂にあらす、物の克く變遷推移するものあるも、
其運動一定の規矩に準じて曾て輸るなきもの、また等
しく停滯の運命を有す。地球の運行にして圓環的なり
せば、世界今日の文明は作られざりしならむ。地球の
運行にして徒らに其故路をのみ行くものなりせば、同
一の軌道上に轉々する球面人類の進歩は計られざりし
ならむ。幸にして我が地球の運行が無窮の螺旋形をな
すが故に、其經る所の大宇宙は常に變轉推移して以て
僅に其沈滯腐敗を免れ得たるのみ。
詩歌の運命亦た此の例に漏れず。詩形の拘束は遂に
詩歌の腐敗を意味するにあらすや、然り詩形の停滯は
直ちに退歩の前提を現象す。

吾人は、『銀鈴』詩風の近時猛烈なる速度を以て、
いたく明星派に接近せむとはしつゝあるにはあらざる

◎三

かを疑はざる能はず。蓋し進氣勃發たる島根詩人の、
最も新らしき詩形を求むるに於て切なるは、聽て茲に
島根詩壇を代表せる『銀鈴』詩風の進況を現出せる所
以にして、遂に吾人をして、其發達を謳歌し其將來を
祝福すべしと號呼せしむるもの、亦故ありと云は
すんばあらざる也

◎二

詩星『銀鈴』の内様に於ける吾人の所見は、暫く之を
云ふを止めむ。且つ一部人士の言ふが如き、些々たる
活字の誤謬等、素より論ずるを須ひずと雖も、詩形の
新化はやいもすれば詩歌の艶麗優暢を欠ぐの傾向に
して、一言の警告を敢てせしむるの止むを得ざる一因
なりと云ふべきに至りては、慨嘆も亦た極まれるにあ
らずや、遮莫詩界の明星を戴ける我雜誌『銀鈴』の
前途健全なる發達をなすべきは理の當然にして、決し
て吾人の呷々を要せざるを斷言するに於て躊躇せず。
若し夫れ纏つて滔々たる世の詩人なるものを見れば
、徒らに寫實のみに戀着して、宇宙の至醇と一致すべ
き事を勉めず、而も其作る所は千編一律、模倣のみ、
先輩の糟粕のみ、而して其歌ふ所は舊派和歌と異るな

く、散文にあらざれば、美的法界節のみ、此くの如くにして詩界の刷新は得て期すべからず。抑詩人の天職は、偉大なる思想を以て、理想と現實とを相近着し、相調和せしめ、人をして眞善美のバラダイスに逍遙せしむるにあり、エメルソンをして「詩人は地の神海の神さては空氣の神なり」とさへ謳はしめたるもの、豈其故なからむや。

時や二月已に破れて三月來る、三月は蓋し四季の冒頭季たる春の先駒なり。三月一度び至る季は正に春に入り、梅咲いて櫻蕾紅く、習風除るに吹き鳥禽之に和して舞歌す。之を冬に較べて穴中日光を得たるが如く爽快也。之を夏に較ぶ、噴火口を去つて溪泉に入りたる如く清新也。若し之を秋に較ぶれば、即ち峻山を超えてまた大洋に掉す如く、心氣の爽味は即ち相弱たりと雖も、其裡又一種悠々の感なきを得ず。然り果して然らば春の詩は殉爛なるべし、紅桃李花影爛熳たるが如く、清香麗姿櫻花の姿態あるが如く、春の詩は和暢なるべし、野霞の蹁躑としてたなびけるが如く、春光の悠々として長閑なるが如く、春の詩は從容なるべし、或は花を弄ぶ才人の如くに、春の詩は亦た以て樂

うぐひす

うぐひす

春の雨傘して添ひぬおん母に驚きくと泥する路を

「聖手れもひ海原れもひ君れもひ端座する日」と交してやりぬ

王城のごとしと言ひぬ船びとは裏日本の吹雪をめで

うぐひすは二の聲あげぬ北國の文せぬ人を思はせつけに

遠鴉の潮さゝつゝ花まちぬ來世思はぬ人に侍りて

「宿縁の果よな能なき御方」と出雲の翁も我を相すや

觀的なるべし、蓋し春は活動の源泉の時なり、萬物蘇生の時なり、以て歌ふべく以て樂しむべき時なればなり。

由來山陰莊嚴の雪景に詩想を練り、北海の浪樂に詩囊を充たしたる島根詩人は、今や百花春風に笑ふの季に會す、必ずや雨後の筈然として、所謂鬼神をして泣かしむる底の大傑作續出して應接に遑なかるべきは、燎として闇夜に灯を見るが如きの感あるを覺ゆ。あゝ仰げば北斗閃として高く懸る、光芒延びて恰も島根詩人の活動を待つもの如し、あゝ張箭一飛誰か天心を穿つものぞ、天琴一彈誰か自然を捉ふものぞ、穿たむと欲するものは、宜しく先づ爾の身に正せ、捉へむと欲するものは、宜しく退いて爾の心を養へ、彼の「人俗中に神靈を發見し、現實中に理想を開發す」的の抱負と「立處高邊眼亦高」的の眼光とを以て、宇宙の秘密を領し、天地の大道を學了せば、乃ち爾の庶幾する以上更に超然として新頭地を出だし、翕然として新機軸を出す事豈難しとせむや。あゝ濟々の多士や、夫れこれに努めよ。

◎四

牧岡馨子

◎五

寒月や氷魂がくれ白熊の吹ゆるさくこと身うちふるひぬ

葡萄酒あふる、胸の玉杯をみ口によせぬ酔ひみだれては

薄化粧はどよき紅の若むらさきみ袖屏風を吹くよ春かせ

彩がめの新酒あふれて精靈さきぬ脈ときみ手のふれし刹那に

舞姫がかざす扇の小がくれに微き音たてぬ變の春笛

氷山の崩づるゝごとき響して浪にゆられぬ春の大船

埋火のほとり

荷影 女史

ゆるさせたまへ今しばしのはどに候へば……
 かくて行く水に、興をゆるわく秋に候ひき。小萩みだ
 る、野を辿りつゝ、しばし浮世を忘れしもゆめのま、
 なつかしきかれを送りては、さなきだにさびしき夕ぐ
 れを、雲あし早きみそらながめて、かこちしもいくた
 びに候ひしぞや。はや感にたへざるものゝごとく、深
 きふかきいきをもらしてしばし言葉はどたへぬ。と見
 れば田舎には見なれぬやさしきわかうど……
 物語に耳かたぶけし老尼はふどかうべをもたげつ、思
 ひ出せし如く埋火かきこしぬ。
 外には風、雪をまいて雨戸にうちつくる音、れいなら
 ず物凄う。わか人は更に更に沈みつ、やゝありて又語
 をつぎぬ。谷あらし淋しき夕このみ山の行者は、山々
 谷々をめぐるべきつとめありとや、和御許はもはやな
 みの人にあらずればせば、ふかきもだねに胸をいだく
 我等を見たまは、をかしかるべきも、かなしきかな

もたへにもだへておそろしき狼のぬじきとなりしかの
 少女の上をおもひおこしては、さすがにうごかすべ
 らざる情のふかきを心になきつ、何をかいはむとして
 強ひてたさへつ、み佛にそなへしみあかしのちいとし
 づみゆくをにらみき。あゝ人とはぬ深山のれくに、お
 こなひすます老尼と、もだへになくわか人とのものが
 たりやいかに。埋火はたい、いとゞしろうのみなりゆ
 くり

われにはつらく候ぞかし。あはれ八重の汐路をわたり
 て、このみ山のおくにたづね來してゝるねをくませ給
 ひて、せめてかれが彼の夕べのさまをだにかたらせ給
 はすや。わかれて後、おこなひすますかれがさま、朝
 な夕なのつとめをむねにうれしかりしも夢のまにて、
 すぐる日もたらせしかれが玉章を見れば、うす墨のあ
 どさへにじみてみだれがらなりしよ。なつかしの兄上
 きかせたまひてよわがあさな夕なを、のぞみ多きあし
 たのさまはまへどかはり侍らねど、この頃にいたり夕
 のつとめは更に一步をすゝめ侍り。もの淋しき入相の
 かね、どもにちりにけがれしすみそめの衣をぬぎすて
 、見るからに心さむげなる白衣どかへつ、遠鹿のなく
 ねさびしき山のふもと、さてはましろのこゑ凄きみね
 をめぐる心細さ……と、こゝまでよみてはあはれの
 うちきよき少女よどあふがれ侍りしぞかし。さりなが
 らこれを絶筆とは、あゝ……わか人はなきふしぬ。
 自若として更にどりみださうりし老尼、こゝにいたり
 てかみしめたる唇いよゝむすびつ、さりながら失戀の
 淵に沈みしわか人をまのあたりにして、かの夕み佛の
 いかりふにれしとはいへ、ふかきうらみをのこして、

うつろ舟

◎七

古川 三尺 (舞鶴)

君どわが涙は金の壺して神に捧げるいと聖け
 れば
 大いなる悲しみれば春の夜の櫻がもどに人
 を怨じぬ
 春の夜を愛欲あらぬ人ならば獨木船してやら
 むと云ひぬ
 夜な〜に君どわか魂たは天へ金蝶どころ舞
 ひのばるなれ

山本 明星 (出雲)

みづらみの汐の香ぬるき舟の宵歌よきはどの
 月まちにけり
 春雨の降る日こだちに人形とまゐる寝してける
 をどめ子ぶりよ
 春の雨女師匠にしたがひてけいこ鼓の宵更け
 にけり

坂本 笑風 (松江)

むらさきの圓緒雪する杜の路木履いたはし君

俳句募集

△課題 春風

△課題 壺 (春季結)

△投稿注意

- 一 一題十句以下
- 一 用紙半紙、各題別紙
- 一 一ヶ月四月十日
- 一 發表本誌第十二號
- 一 三座ニハ本誌一部ツナ呈ス
- 一 銀鈴社編輯局アテノコト

奈倉梧月選

祝 羽風選

の來ましぬ

いささ川流れをくみてうらぶれの繪の具とく
子と我なりにけり

前田 木風 (伯耆)

たぼろ夜を見知りし人に笑はれて君と別るる
花づつみかな

もやめぐる町家のなかの青柳にもてあそばれ
ぬ春の夜の月

椿ちる小家よろしき嵯峨の里京のひと在り春
の雨して

うす月や梅の戸にふる淡ゆきをめでてればす
る都びどかな

福間 如舟 (出雲)

みすまるの五百個の珠か天姫が纏くに光れる
星やあけぼの

はれやかにいさ光り射ぬ曙のみ空ゆ遠く幾矢
ひさける

竹林 坊 (瀬原)

木下蔭額ふせ祈る「かん母の病癒ゆよ」のあけ
かさや君

春の殿

牧岡馨子

花姫清夜の御遊どや
日の丸抜きし金扇を
玉の緞手に打かざし
緑の御髪ふさ〜とど
紅絹裏がへる羽袖風
留木の薰なよやかに
絹すれ艶なる舞すがた

紫紺の夜の幔幕のうち
金屏築きし春の殿。
金剛石を鏤ばみし
薄紫の裳ひき

玉歴はしきかんばせの
月姫舞臺に出でましぬ。
百合花にも似たる御手の内に
あたりまばゆき七つの灯

立石 洲洋 (出雲)

飛ぶ蝶の翅しあらば花に香にさては平に酔は
ましものを

七彩の雲おもむろに東の海より出でぬ白光れ
びて

増野 翅白 (濱田)

川をひやこばれ櫻に頬をうたれ駕籠にゆられ
てゆく春の月

舞ひぬれば伽羅のかをりは紫の糸よりひきぬ
京小袖かな

扇どり「さらばみゆるし候へな胡蝶の舞に衣
はこらめ」

前號正誤

前號所載の重なる誤植。四頁「漫語」初行「や
出して」は「やり出して」五頁「春の暮」第一聯
三句「この娘」は「一の娘」六頁十一行「すべ
ればなり」は「すべけひなり」の誤 七頁十一行
「梅」の下「皆」を脱す、十七行「成るべさ」以下
「戀もなかりけり」八頁八行「紺青を」は「紺青
の」十二頁二行「立田」は「立石」同頁五行「花
折りし」は「花折りて」十三頁六行「溪雲」は「
雲溪」の孰れも誤なりし

◎八

くまなくいさす御光に
金泥流す瑠璃の床

小高き森や青摺の
歩障斜に伶人が
浮線綾の御裾に
なよび品よき居すまひや
玉をまろばす御聲して
調べも清き流水の
曲に合する琴のうた、
澄むは龍女が鈴の音か
急に高なる變の胸
沈むは姫が怨し言
美女が叫びささ〜とど
装飾の松に反響して
雲井に冴ゆる彩霞の

◎九

囚はれし人と放たれし人

こは、わが偶感録の一節なり、ひそかに感ずる所ありて、ここに公表することとなし。

大屋生

一 臆病なるかな囚はれし人、大膽なるかな囚はれし人。彼は眞理のために囚はれたればこれをはなれて何事もなすこと能はず、彼の臆病なる所以なり。然れども、眞理の命ずる所何者の恐るべきなく、不退轉の大勇猛心を以て突進す、彼の大膽なる所以也。然れば或一種の意味に於て、囚はれたる人は放たれたる人たる也。

二

大膽なるかな放たれし人、臆病なるかな放たれし人。彼は何者も自己を檢束するなければ何事をなすにも自由なりと掲言す。しかも、世を懼れ人を怖れて事をなすに逡巡するものなり。これ彼の大膽にして臆病なる所以なり。然れば放たれたる人は或一種の意味に於て囚はれたる人たる也。

春三の期

はれてあらんことを望むものなり。

湖音會俳句 (出雲、乃木)

草野誌に掲げ來りたる「啓友會」を「湖音會」と改稱し二月第二十一回例會を波秋庵に開く。(湖洋生)

梅園に病のひと語りけり 陶水
 紅梅や竹も植ゑたる詩仙堂 笨堂
 鼠出て何物かぢる余寒かな 涼風
 草摘で太郎疲れぬ三日の月 同秋
 餘寒ニアカ波を溪の間に 波秋
 梅賣る嵯峨の少女や京の町 峰秋
 摘草や左は筑波右は富士 松聲
 名所路は尙一里あり春霞 如舟
 陽炎や物の骨ある陣の跡 笑風
 陽炎たつ草野の晝煙を打つ 淵洋
 木標にそはふる雨や春の旅 同
 船橋に故國の山は霞みけり 同

放たれたる人幸福なるか、彼に巨萬の富はあり、金殿玉樓はあり、美女のかしづくはあり、然れども彼に一の至誠あるなし、涙あるなし、靈の糧あるなし。不幸なるか囚はれし人、彼に黄金なく、門地なく、美衣美色なし、彼は赤裸々なり、無力なり、されど彼は拜すべき巳の神を有するなり。されば前者必ずしも幸福にして後者必ずしも不幸なりとは斷すべからざるなり。

四

自由は、放たれたる人にあるが如くしてならず、囚はれし人にあらざるが如くしてあるなり。放たれたる人は何物を得らるべきが如くして何物をも得ること能はず、囚はれたる人は何物をも有つことを得られざるが如くしてすべてを有つことを得べきものなり、前者は富める貧者にして、後者は貧しき富者たるなり。前者は安きが如くして安からず、後者は安からざるが如くして安し。

五

囚はれんか、放たれんか、そはわれ等の撰ぶに任せらる。臆病か大膽かわが知る所にあらず、われは唯、眞の自由、眞の幸福、眞の平和を希ふが故に、絶えず囚

勿告藻

(松江支部)

◎十二

能美紫星
 街道や電燈あまた居並びてひるのやうなる夜をつくりけり

野津さくら

ねごそかや階をのぼりて繪馬堂の鹿毛に世ならぬ姿かしこむ

田中采山

春園に君がみ手とり逍遙のまぼろしほのに幾日へてけむ

松原葉櫻

上乃木や人參畑のかたかげにあかさ花咲き冬は來にけり

長谷川涼風

提灯は人にもらひぬ凍る夜をあんまの笛のかすかなる街

久保田双蝶

世は終に夢のまことの身となりぬわれも泣きぬる學士もあれば

清 麴 舎
下り瀟車驛鈴さきてわけばのをならびてれば
す都びどかな

船 木 波 秋
またさらに濃青の空を春の野をはめては行く
か優し七人

三 島 溪 雲
怪鳥鳴く迷宮めさしこの山に持住とわれは四
年老いぬる

中 津 峯 秋
似ずや我吹雪枯野を捕はれの鞭にね堪へでな
く小羊と

福 間 如 舟
賜びにしを古りし詩想とまた泣きぬ廻らむ期
なきうたの運命か

坂 本 笑 風
むらさきの濃紅の花に新らしき匂は添ひぬれ
ん君が園

立 石 洲 洋
奇しみ手に美し暮は開ぬ酔心地る春宵の夢

後 藤 孤 星
月と帆とねむるがごとき春の海藻の香かよひ
ぬ磯曲の人に

河 野 素 陽
ばん傘と蛇の目とならぶ祇園町柳に春の雨ふ
りけりや

あらし山櫻ふぶきす夕月に狩衣したる三五の
人よ
春の海からに通へる船頭が腕よくあかつ
きの風

松 本 掬 雨
銀盤にましろき珠のまろぶと波を出でけり
春の夜の月
燭かこみ花のやうなる女たち平語さく夜の春
の月かな

内 裡 雜

(濱田支部 同人)

増 野 翅 白

臘月の木の間をもるうす霧に天女ぶりなる
裳ひさぬ君は

以下京の雑妓に代りてはるを歌へる

桃さかば源氏車に市松の幔幕ひいて鼓はうた
ひ

宮詣で鳥居のそばに八十眉の禰宣在はしける
白梅の花

さくら狩り扇柏子を強ひられて雛たまへと興
じけるかな

清水の塔のあたりに出づると袖に灯をねひ
月をまつかな

彼岸會や古代鬘結ひ日傘してみ寺詣での下京
の町

森 脇 桃 村

美しき歌よむ君が朝髪に海棠ちりぬ三徑の庭
岡象女のゑまひに似たり隠沼に奇鳥さて鳴く
しのびの聲は

◎十二

◎十三

短 歌 小 評

第十號

△「銀鈴」第十號到着、何もろちのけに繰返し拜誦いた
し候。二葉様の御詩一番うれしく、幾度かあかず愛誦
いたし候。御姉の御作いつもしんみりして、ひきしま
つた厭味なき美しくしさ、實にうらやましく存じ候。短
詩小評いつもとくとく拜見、後學のわれ等のため嬉しく
ぞんじ候。(そでのばな)

△辟頭七星氏の四首はいづれもめでたく中にモ「夜の
霞」の叙景を愛誦いたし候。久し振りに二葉女史のお
ん歌に接し、まづ小さき胸とどろかし申候。巻中いづ
れもめでたく候へ共、中にして「東」に「霜月や」「辻
町や」「冬晴や」再誦三誦飽くを知らず候。花藻玉藻
(日本海的女王)三長君獨特の筆、梅櫻桃李とかざられた
るその美しくしさ、眼もあやなるばかりに候。桃村君、
掬雨君、孤星君共に同窓の友、謹んで更に感興の深き
を覺候。東岳先生の「戦捷の國家」は黄口兒我等の
口を入れるべき所にあらず唯以て前途の燈明臺となすべ
きものに候。牧岡女史新進の秀才、欲する所に筆到ら
ざるなき多能の士「舞姫の」「春の海」「馬槽に」を愛

吟致候。其他支部咏草に於て、桃村君「白馬に」孤星君「西の國の」「山の日や」翹白君「かげろふや」「鶯の」「七星氏」「あけぼのの」「峰秋氏」「嚴の」「洲洋氏」「さかしらの」「等いづれもめでたく候。「散紅葉」中の秀れたるは洲洋氏の「花折りて」紅雨氏の「紅の」「古川氏の」「月夜街」晚花氏の「雪ふれば」左一氏の「遠江」等と存候（素鵬）

漫語一

○人間といふ奴は横着なもので何程己が好いた事でも、多少の月日がたつとゼンマイが弛んで来るものだ。處が俳家梧月君の意志の強い事と云つたらない、本當に十年一日の如く俳に盡瘁して居る。生は鐵石の如き同君の心意を竊かに想見して、實は或る事に利用して居る（リーフ生）

○君は發句をやるげなど言はれた時と、鏡川郡をヒカワグンと聲高に讀む人の傍に居る時とは、思はず冷や汗が出る（啼かぬからす）

くれなる

大屋左一

眼をどぢし裸形の人に矢放ちて興がる世ぞと
火は投げられぬ
こよひ八つ火の雨すると高塔に叫ぶをききぬ
木枯の暮
みことばに火の室くぐる百日のわれにも來む
どたちろきし日や
聖手はなれ獨り行きてはつまづきぬ血にしむ
額に泣きぬ冬の日
ききぬぬも見ぬぬもうれしつれなきは凡夫が
性と聖手あふぐかな
手はなちてかへりみするには、笑みて物言ひ
たげの相形や君
「をちかたの音たてぬ鶴」に譜あはせて御光た
たふ人なつかしむ
大河内香よき葉稻を右に見てむつがたり行く
白衣の人

◎十四

漫語二

◎十五

薰風や波しぬ廣田朝なごの海と水底の宮殿か
もひ出ぬ
紅かつぎうす光するあかつきのうばらが香し
て行く二人かな
淡紅の花降る里に朝日して光りぬ水のよきひ
びきかな
白蓮華紅きは紅の香放ちてけじめはこらぬれ
ん國なれば
白薔薇のかほりに泌むとよりも來ば騙りいな
まぬ夕月夜かな

▲「銀鈴」投稿規程

- 一 何人といへども投稿することを得
- 一 用紙は半紙全葉を用ひ半面十行二十四字詰
- 一 種類毎に別紙を用ひらるべし
- 一 締切は毎月末日限
- 一 本社編輯局あての事、社員の一人在てたる投稿は、他の社員に於て開封せざるが故に、掲載遅延するともあるべし

○和歌本領家が俳句の選をなし、俳句本領家が和歌の選をなすが如きは、所謂柄でもないといふ奴で、それは正しく見るに足るものがないのだ。獨りそれに限つた事ではないが、自分が研究的に或点まで窺ふといふのはよからう、又必要もあらう、併し其物は決して人前へ出せたものではない、二兎を逐ふものは一兎を得ずとはよく言ふたもので、實に二兎を得るといふ事は難中の難である。燕村が俳句に成功し、繪畫にも成功した如き例は絶体がないが、それはいふまでもなく天才が二つ備はつて然らしめたので、決して勉強の二字で出來たものではない。紅葉山人が相當俳才を有しながら終に成功する事は出來ぬのであつた、子規子が和歌を研究して一道の光明を興へ、復興的氣運をつくつたのは間違ないが、作品として未だ成功の壇に上り得なかつた事は何人も認むるに憚からぬであらう。碧梧桐虚子等の士も、一時和歌に熱中されたことがあつたが、暫時にして止んだ、其止んだのは兩氏の爲めに誠に喜ぶべき事であつた。二兎を逐はざるの智は遂に成

功を得た所以であつた。二兎を逐ふ凡々者流の事推して知るに餘りあるではないか。公平にいへば、一兎さへも覺えない位、七細工八貧乏といふ語も亦よく此間の消息を教へて居る。而して今や益々非常なる弊化力を以て生れ出で、全國を飛び回りく是等の雀天狗燕天狗は、人々の面顔を臆面もなく掠めて得たりとして居る。心あるものは五月蠅さに堪へぬことだ。片端から日の透き通るやうな其薄い尖つた鼻をヒン折つてやるがよい (天劍)

○俳友紫城近く總の野田から飯つて来て、色々同地の狀況を話したが、同地には茂木孤松君の率ゐる三千草會といふ俳團があるそうだ。處が會員中に不幸身体が不隨で歩行が出来ぬ某君といふがある。同人運座を開く時には、誰か態々迎ひに行つて脊負つて来て、運座が終ると又脊負つて送つて行くのだそうだ、脊負ふ者も何とも思はず、脊負はれる者も夫れに甘んじて居るそうだ、友情掬すべきである。僅はこの話を聞いて其上に又一種の俳的興味を感じたのである。ナント諸君、僕が若しそんな身体になつたら三千草會の某君の様に、同じ待遇をして貰へるだらうか (南華生)

控 ね 帳

▲「新小説」がこの頃文苑欄を盛に出したのは何より嬉しい。而し五十嵐素香などはランでか咄にならぬ
▲今年になつてから中央で大分雑誌が殖へたようだが早稲田文學曰く藝苑曰く小品文曰く何曰く何曰く何
▲大東から出る文學雜誌「草笛」は明星董塘氏等の熱心で漸次牀裁も整うし材料も豊富になるし兎に角萬歳だ
▲本誌の詩人二葉は小説家でないふと廣津柳浪だ。其の深刻な筆は到底他のものが及ぶ所でないと思ふ。
▲俳句の三座は月並臭いから廢するがよからうとクヂラの稲青が云つてゐる僕も成程と賛成する諸君何うだ
▲新聞雑誌の廣告はど當にならぬものはあるまい。就中新刊書の廣告と来てはイヤ能うも法螺の吹ける物だ
▲品子の歌はいつ見ても清々する鐵幹はドツチかといへば長詩の方が得意らしい。茅野蕭々さんのは平凡だ
▲吉井勇といふ詩人はよく船とか海とかに關係する詩を作る男だ試みに明星一冊を執つて見給へどお勸申す
▲雜誌草笛が廢刊してから十峰八重櫻氏等の手に新に俳句雜誌が出来るとうだ氣永く思つ續けて欲しい。

社 告

親愛なるわが社友及び讀者諸君。
本誌が創刊以來、自ら趣味の藪吹に任じながら、毎に蕪雜なる体裁を以て江湖に見ゆ候は、社中同人の誠に慚愧に堪へざる所に於て、却つて或は一般の趣味を害ひ候やらむと私かに心苦しく存候。さり乍ら既に前號より草笛と合同し毎月發行に更め、一段の努力を加ふべく決意致し候やうの次第に候へば、諸君に於かれ候ても、われ等同人の微衷を諒せられ、注告を各まされざらむことをこそ、ひたすらに希望仕候。而して本誌擴張につきても力を寄せられ候やう、併せてわれ等の冀ふところに候。終に臨みて諸君の、いよよ斯の道に清興を加へたまはむことを祈り申候。
銀鈴社同人

◎十六

寄贈新刊

- 國 詩 (二ノ一) 東京國詩社
本誌は丙午の第一号をもつて蘇生りぬ。例によりて東部詩人の大半を網羅す、但新詩社の同人はあつからず。
- く ち ら (三ノ七) 紀 伊 其 發行所
每號最も趣味をもつて讀了するは、この俳誌なり。
- 山 鳩 (三ノ四) 岐 阜 新 文 藝 社
元の新文藝なり、地方文學雜誌中の見るべきものなり。
- し ぶ き (一ノ八) 愛 媛 シブキ會出版部
やゝ調ひたる俳句雜誌なり、吐月の母の愛、青風の俳句資料の解釋
按史の俳諧からす等おもし。
- 五 月 (三ノ二) 名古屋 五月 會
いやみのない俳句雜誌である、俳文もちよつと面白い。
- 月 華 (三ノ二) 長野縣 少年同志會
あまり材料が雜駁に羅列してあるのはをしまむべしです。
- 野 守 (二ノ一) 京都府 此 樂 社
天下唯一の三號雜誌だとふれ出して氣候をほめかしてゐる、ちよつとした俳誌である。
- 若 櫻 (二ノ二) 下 總 文 學 會
地方文壇の中堅には如何はしきふしもあれど、絶えず精進せば所期の目的を達せざることをなかるべし。本誌「なかつち」をのぞきては所載の長詩、短歌、俳句共見るべきもの少きををしまむ。
- 衛生談話 (六ノ一) 東京 通俗衛生茶話會
本會は國家的衛生並に個人的衛生の普及發達を圖り修ら智育徳育の發達に努むるを目的とす。本誌の内容を知るべし。

銀鈴社清規

一文藝を愛するものは何人とも雖も本社々友たることを得べし。
 一社友は「銀鈴」誌代六ヶ月分以上前納者たることを要す。

一社友は社内同人を経て本誌編輯の議に參與することを得。

一支部社友は本社直接の社友と同一の待遇を受くることを得べし。

一社友名簿は本社に之を備ふ。但支部は當該支部限り之を設くることを得。

銀鈴定價表

定	價	郵	稅	廣	告	料		
一	部	金	五	錢	金	五	厘	一行五號活字二十
六	部	金	參	拾	錢	四字詰貳拾錢
十二	部	金	五	拾	五	錢	中頁貳圓
								一頁參圓
								郵券代用一割増

廣告

河野翠漱著
杉浦朝武畫



短歌零話

全

實價拾五錢
郵稅貳錢

內容概目

△歌とは何ぞや△神來△歌の用語△櫻翠の詩△空想△難解なる詩風△萬里の詩△戰爭詩△島根詩人評△平易なる歌話等

發行所

島根縣邑智郡田所村

銀鈴社

明治三十九年三月十七日印刷
同 年三月二十日發行

發行所

島根縣邑智郡田所村 大字下田所七三二
編輯兼發行人 河野 岩 雄
同縣飯石郡赤名村大字赤名八百三番地 印刷人 木村 柳三 郎
同縣同郡同村大字同八百三拾二番地 印刷所 赤名活版所
島根縣邑智郡田所村
取次所 銀鈴社
同 安達共榮堂
同 古井圭山房
同 山本芙蓉堂

銀鈴第十一號 每月一回二十日發行
明治卅七年一月十四日第三種郵便物認可

明治三十九年三月二十日發行